調査研究報告書第 372 号

「彩の国」さいたま 埼玉県

埼玉県のマスコット
コバトン

学校応援団の学習支援活動の取組と成果の調査研究

生涯学習推進担当

埼玉県のマスコット　コバトン

埼玉県立総合教育センター
Saitama Prefectural Education Center

学校応援団の学習支援活動の取組と成果の調査研究

目次

Ⅰ　研究主題 1

Ⅱ　主題設定の背景 1

Ⅲ　研究の目的 2

Ⅳ　研究の進め方と経過 2

Ⅴ　研究の内容 3

1　教育委員会の取組の調査

2　小学校・中学校の取組の調査

Ⅵ　学校応援団の学習支援活動の取組と成果 5

教育委員会の取組の調査結果のまとめ ..... 5～9

小学校・中学校の取組の調査結果のまとめ ..... 10～20

Ⅶ　研究のまとめ 21

Ⅷ　資料編 ..... 22～38

資料 1

資料 2

資料 3

Ⅰ　研究主題

学校応援団の学習支援活動の取組と成果の調査研究

Ⅱ　研究主題設定の背景

学校応援団の県内（政令市を除く）小中学校での組織率は、平成２４年度１００％を達成した。すべての小中学校において組織された学校応援団が、地域の特色を生かした活動を始めて順調な成果を残している。学校応援団は、平成２５年度埼玉県教育行政重点施策「生きる力を育て　絆を深める埼玉教育」の中の基本目標Ⅳ家庭・地域の教育力の向上の中に、「学校応援団」の推進として掲げられている施策のひとつである。これは、文部科学省の学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業の中の地域住民の参画による「学校支援地域本部」の教育支援の取組につながるものである。文部科学省の［学校支援地域本部の概要］では、社会がますます複雑多様化し、子供を取り巻く環境も大きく変化する中で、学校が様々な課題を抱えているとともに、家庭や地域の教育力が低下し、学校に過剰な役割が求められています。このような状況のなかで、これからの教育は、学校だけが役割と責任を負うのではなく、これまで以上に学校、家庭、地域の連携協力のもとで進めていくことが不可欠となっています。このため平成 18 年に改正された教育基本法には、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力の規定が新設されました。学校支援地域本部は、これを具体化する方策の柱であり、学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子供を育てる体制を整えることを目的としています。そして、学校教育の充実、生涯学習社会の実現、地域の教育力の向上をそのねらいとしています。(文部科学省ホームページから抜粋)と説明されている。

学校応援団は、学校・家庭・地域が一体となって子供の育成に取り組み、学校の活性化を図り、家庭や地域の教育力の向上を目指しており、必ずしも子供たちの「学力向上」を趣旨や目的にしていない。しかし多くの学校が、「学校応援団の様々な活動を通して子供たちの、行動が積極的になり、生き生きと活動するようになった。特に学習に対して意欲的になり学力が向上した。」という感想を持っている。県の課題である学力向上に対して様々な取組が行われている中、教員の授業力向上は欠かせないが、授業力を向上させる研修、教材研究などの時間的余裕や授業力向上の意欲や熱意などがなければ成果は期待できない。学校応援団の取組は、教員をサポートする役割を持っている活動でもあり、学習活動への支援の活性化により、教員が一人一人の子供たちへの指導に対応できる学習環境づくりが可能となる。このことが、学力向上のキーポイントであると考える。本来、学校・家庭・地域が一体となって子供を育成し学校の活性化を図り、家庭地域の教育力の向上を目指す学校応援団の取組ではあるが、子供たちの学習意欲の向上、学力向上、豊かな心の育成、思考力、コミュニケーション能力など様々な力の育成、向上に多くの成果を残すことができる取組でもあることを、各学校への実態調査を通して明らかにする。特に学習活動への支援の実態を把握し、学力向上への効果や方法などを考察しまとめた。

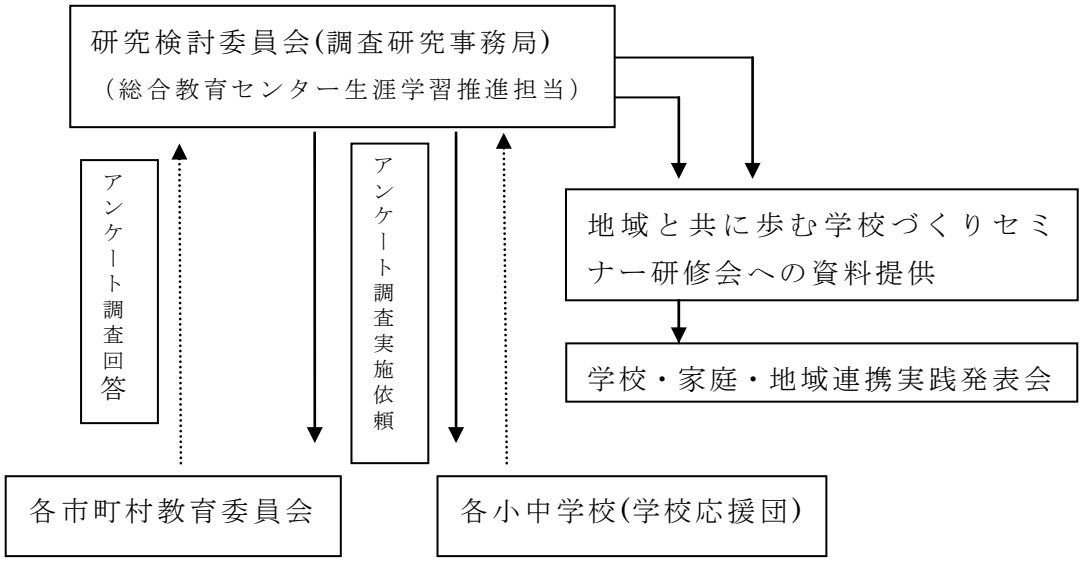
Ⅲ　研究の目的

①　市町村教育委員会、学校、学校応援団との連携。
②　学校応援団の学習活動への支援の実際のまとめ。
③　学習活動への支援と学力向上の関係の明確化。
④　学力向上に効果的な学習活動への支援のまとめ。

Ⅳ　研究の進め方と経過

第１回調査研究検討委員会議
・研究内容の詳細確認
・年間計画の確認
第２回調査研究検討委員会議
・資料の収集
・アンケート検討
（総合教育センター　地域とともに歩む学校づくりセミナー研修会　資料提供）
第３回調査研究検討委員会議
・資料の検討
・アンケート実施
（学校・家庭・地域連携実践発表会参加　南部、東部、西部、北部）(資料収集)
第４回調査研究検討委員会議
・アンケートの集計
・アンケート結果の検討
第５回調査研究検討委員会議
・研究のまとめ
(研究成果発表)

研究組織図



Ⅴ　研究の内容

学校応援団の学習支援活動の取組と成果

1　教育委員会の取組の調査結果

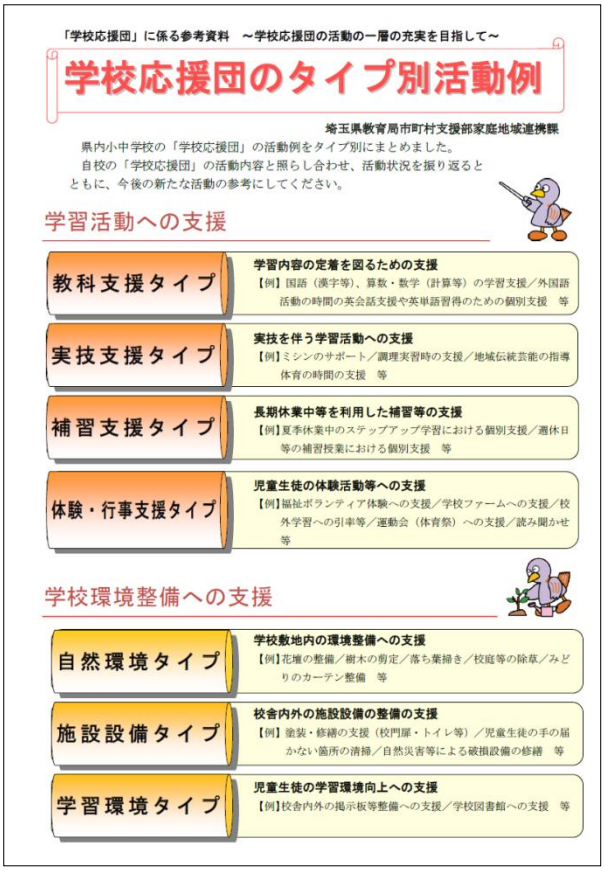
① 教育委員会、学校、学校応援団の連携（三者会議等の実施状況）
② 教育委員会からみた学習活動への支援とその効果
③ 学校と地域との関係
④ 学校への支援のこれから

2　小学校・中学校の取組の調査結果

① 学校応援団活動組織
② 学校応援コーディネーター
③ 学習活動への支援の内容と効果
④ 個々への指導の時間の拡充
⑤ 学校が考える効果的な学習活動への支援内容
⑥ 学習活動への支援の継続と内容の充実

学校応援団タイプ別活動例

学校応援団の活動は、活動種類別に次の４つに分類されている。その内容は、「①学習活動への支援、②学校環境整備への支援、③安心・安全確保への支援、④部活動への支援」である。４つに分類された活動種類をさらに内容別に３～４タイプに分けて支援内容を明確にしている、各学校が支援をしてもらいたい内容を明確にすることで、支援ボランティアも具体的活動内容が明確になり円滑に活動を行うことができている。



（県教育局市町村支援部家庭地域連携課「学校応援団のタイプ別活動例」から）

今回の調査研究では、４つの活動種類の中の「学習活動への支援」について焦点を当て子供たちの総合的な学力の向上との関係を明らかにするとともに各学校が取り組んでいる支援の内容等をまとめ、さらに個々の支援内容がどのような力(能力)の育成になっているかなどを考えていく。

この調査研究を行うにあたって、市町村教育委員会及び県内各市町村立小・中学校（政令市は除く）に対してアンケート調査を行った。(資料２)

【市町村教育委員会及び県内各市町村立小・中学校（政令市を除く）の回答率】

○市町村教育委員会　　６２教育委員会　　５３教育委員会回答（85.5%）

○市町村立小学校　　７０５校　　６１３校回答（87%）

○市町村立中学校　　３５４校　　３１４校回答（89%）

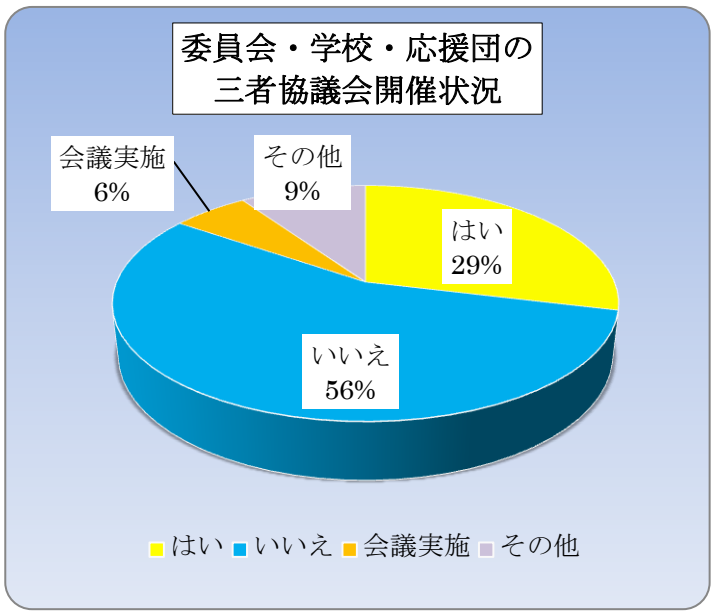
Ⅵ　学校応援団の学習支援活動の取組と成果

１　教育委員会の取組の調査結果のまとめ

①教育委員会、学校、学校応援団の連携（三者会議等の実施状況）

各教育委員会へアンケート調査を実施し、６２市町村教育委員会（政令市を除く）中、５３教育委員会の回答を得ることができた。（回答率８５．５％）
（注：アンケートの問の番号と、調査 1～6 の番号は一致していない）

調査１
教育委員会、学校、学校応援団代表（コーディネーター）による協議会組織等があり、合同会議等を行っていますか？



＊学校応援団の運営に関して、教育委員会、学校、応援団(代表)の三者による運営協議会等を開催し組織的に取り組んでいる学校は全体の３割程度にとどまっている。半数以上の学校は、応援団(代表)とのやり取りだけで活動している状況である。この数字は、学校応援団組織の立ち上げの時の教育委員会の関わりと、ほぼ同じ数字を表していることが分かる。(調査２のグラフ参照）学校によっては、協議会はないが必要に応じて二者での話し合いを設け意見交換、活動内容の精選・新規提案、情報交換等を積極的に行っている。

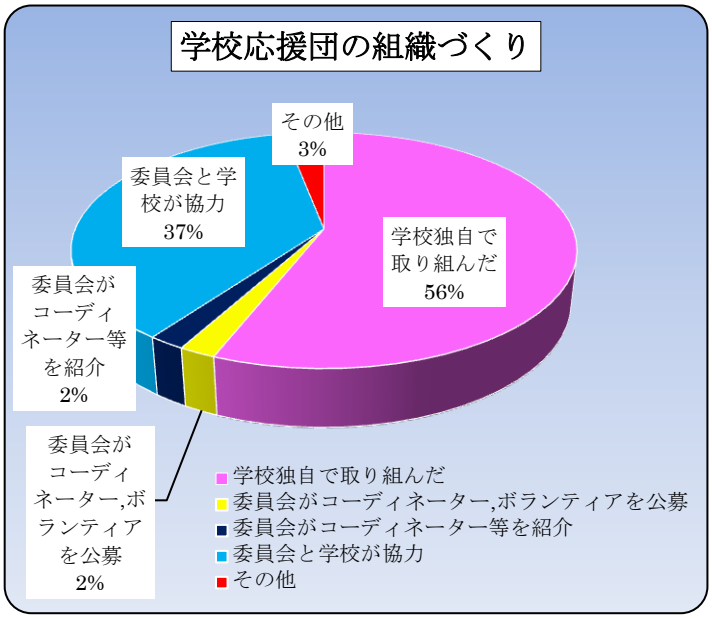
教育委員会が主導している、または教育委員会が深く関わっている学校の応援団は、活動が豊富で学校支援ボランティアの人数も多い傾向にあることが分かった。活動が豊富な理由として、市町村教育委員会主催のコーディネーター研修会や支援ボランティアの複数校での活用、他校との活動内容の情報交換や新たな活動の情報提供などが、運営協議会等で話し合われる結果であると考えられる。

【教育委員会、学校、学校応援団(代表)の三者による運営協議会の各地区の名称】

☆　○○市(町)学校応援団推進委員会	☆　○○市(町)学校応援団連絡協議会
☆　学校応援団支援者本部	☆　学校応援団実行委員会
☆　学校応援団推進委員運営委員会	☆　学校応援団学校支援地域本部
☆　学校応援団コーディネーター会議	☆　学校応援団づくり推進委員会
☆　フレンドシップミーティング	☆　学校応援団情報交換会
☆　小中学校　学校応援団研修会	☆　地域子どもサポート本部会議

調査２

学校応援団の組織づくりや活動開始時において、教育委員会は、どのように関わりましたか？



＊各小・中学校が学校応援団を組織し活動を開始するにあたって、半数以上の学校が、独自に応援団を組織し活動を始めている。学校応援コーディネーターの人選や支援ボランティアの募集等、地域の特色、実態に合わせた組織づくりを進め活動を始めていることが分かる。地域の情報をもとに学校と深い関わりのある方に学校支援コーディネーターをお願いしていることが多い。（調査１０コーディネーターの経歴参照）また、支援ボランティアに関しては、学校便りや地域の回覧板、学校のホームページ等により募集をかけて人員確保に努力している。

その他に、地域の企業、商工会、青年会、婦人会や老人会、ＮＰＯ法人などへも声をかけ連携し協力いただいている学校も見受けられる。今現在、学校応援団を継続させ、活動の活性化を進める上で学校応援コーディネーターの人選と支援ボランティア等の人材確保が課題となっている。

学校応援団の組織を立ち上げ、活動開始時に教育委員会と連携して組織づくりを行い活動を始めた学校は、三者による運営協議会等も同時に組織している場合が多く、比較的スムーズに大きな問題もなく活動の継続がなされている。また、新たな取組などへもチャレンジし、学校の活性化とともに地域全体の活性化にもつながっている事例もある。

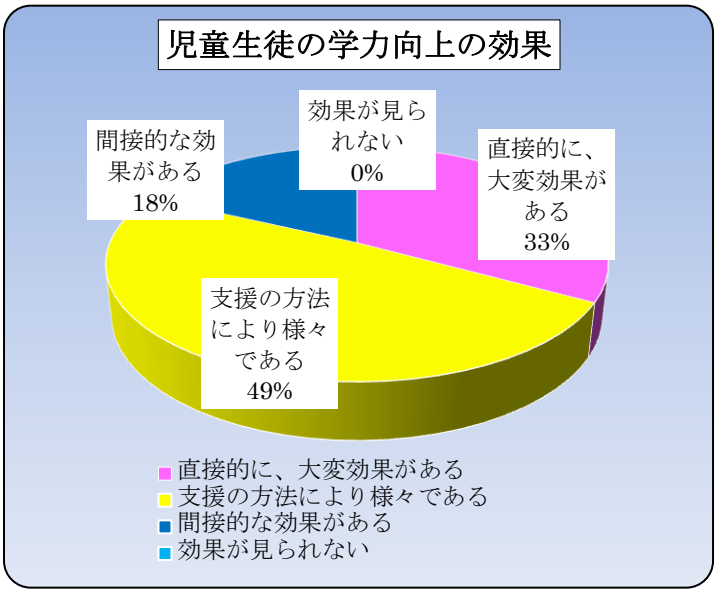
【その他の内容】

＊平成１７年度の事業立ち上げの際には、協議会を設置し学校等と協力して組織した。現在は、校長の推薦により教育委員会が委嘱したふれあい推進長（学校応援コーディネーター）を中心に、学校が年度ごとに組織している。
＊平成１８・１９年度、県教育委員会「元気な学校をつくる地域連携推進事業」の指定を受けた Ａ 小学校の取組をモデルとして紹介し、各小・中学校の組織づくりを推進した。
＊町の予算より、地域ふれあい推進事業費を各校分確保し、学校応援団の活動に対してバックアップしている。
＊学校に対して情報提供、情報交換等行っている。

② 教育委員会からみた学習活動への支援とその効果

調査３

教育委員会からみて、各学校の学習活動への支援の取組は、児童・生徒の学力向上に効果がありますか？

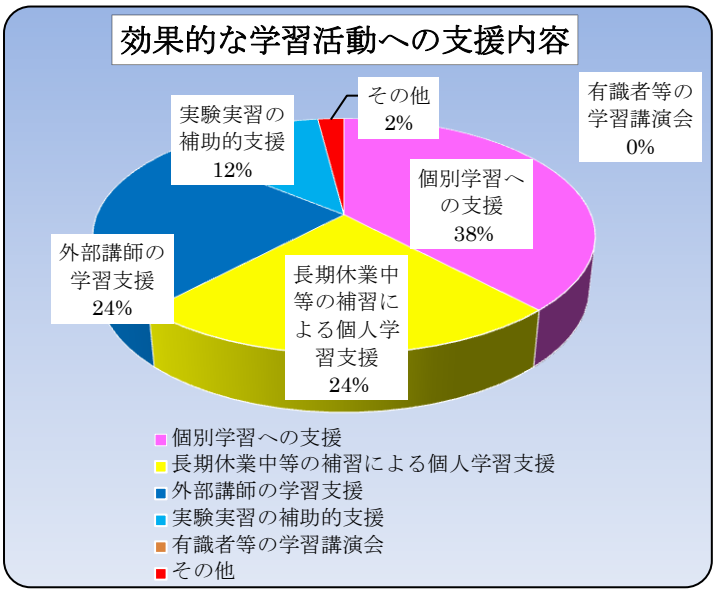


＊調査の結果から教育委員会では、学校応援団の学習活動への支援について児童・生徒の学力向上に効果があると考えていることが分かる。半数の学校が学習活動への支援を行うことによって直接および間接的に学力向上につながっていることを感じている。また半数の学校は、支援の方法、内容、支援者によって学力向上につながる場合とそうでもない場合があると感じている。ただ、あまり効果が見られないと答えた教育委員会は全くなかったことを考えると、学習活動への支援は、児童・生徒の学力向上を含め学習意欲の喚起や学習態度、姿勢の育成・改善、興味・関心を持つなどプラスの効果が必ず期待できる取組であることが言える。

次の調査４は、学力向上にどのような支援のスタイル、内容が効果的であるかを調査した結果である。

調査４

学校応援団の学習活動の支援の内容として、学力向上に最も効果がある取組はどのような内容ですか？（複数回答）

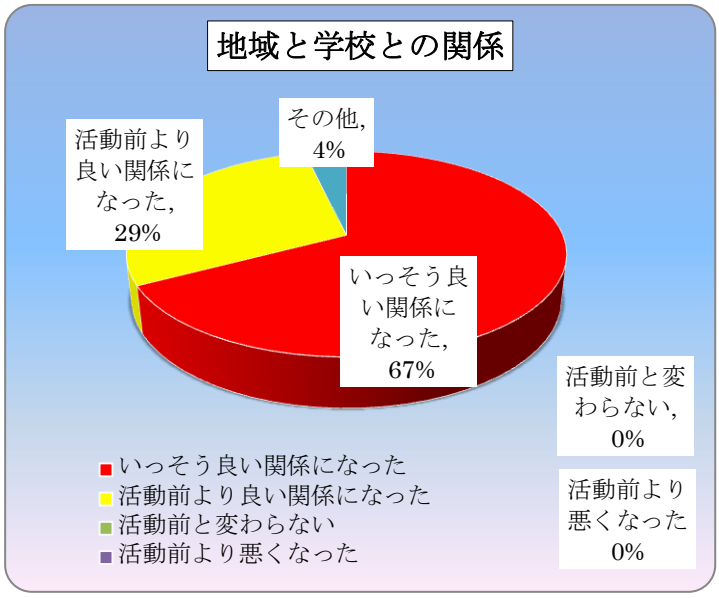


＊調査の結果をみると、個別学習への支援のスタイルが約４割弱である。続いて長期休業中等の補習での個別学習への支援。外部講師、専門家による（ゲストティーチャー等）学習支援。実験実習の補助的支援。と続いている。有識者等の学習講演会については、回答がなかった。上位２つの支援スタイルを見てみると、個別の学習支援による内容であることから、例えば、児童・生徒が学習のつまずきや理解が不十分なことに対しての質問を、支援員が個別に答えたり説明したりできることがあげられる。また、支援員がサポートすることで、多くの児童・生徒に対し、教員の個別指導が可能になることが考えられる。

③ 学校と地域との関係

調査５

学校応援団の活動によって、地域と学校がより良い関係になっていますか？

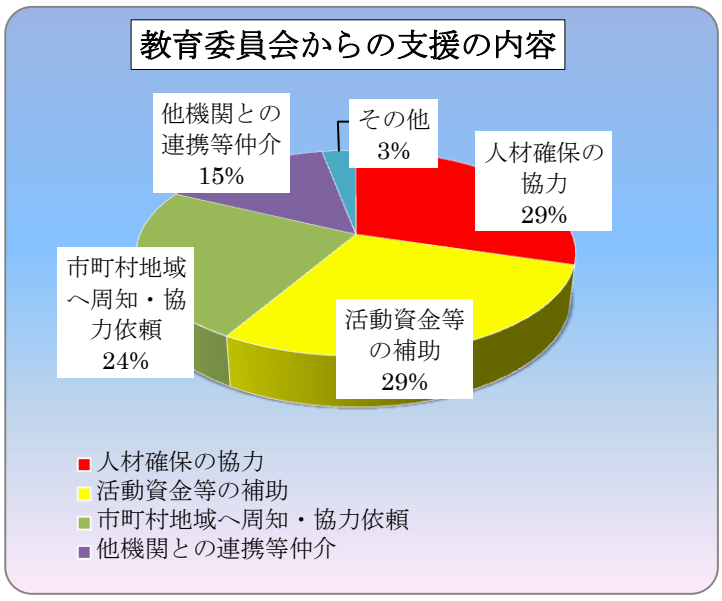


＊地域の人材を学校へ取り込み学習活動への協力を依頼することは、学校と地域との信頼関係がなければうまくいかない。調査５は地域との関係性を教育委員会からみた場合である。地域と学校とが以前よりいっそう良い関係になったと感じている教育委員会が７割弱ある。これは、学校応援団の趣旨である、学校、家庭、地域で一体となって子供を育成する取組ができていると言える。今後、良い関係を継続させるためには、相互の連携、協力が必要である、一方的な支援ではなく、学校から地域への支援、協力（地域の行事への参加・協力、地域清掃等のボランティア活動への参加）も必要になってくる。学校は応援団の協力を得て活性化を図りつつ地域との信頼関係を構築する必要がある。

④ 学校への支援のこれから

調査６

教育委員会として、今後の学校応援団活動の充実に向けて各学校にどのような支援が必要ですか？（複数回答）



＊今後、学校応援団活動を充実させるためには、教育委員会の支援は、欠かせない。調査１、２の結果が示す通り教育委員会、学校、応援団(代表)による三者の運営協議会等の組織は大変重要になってくる、調査６が示すように人材確保の協力、活動資金等の補助、地域への周知などは、学校応援団活動の課題となっている事項であり、教育委員会のバックアップがあれば学校として大変助かる支援である。その他の項目を見てみると具体的に学校応援団推進連絡協議会の設置、学校応援団ボランティアの保険加入の問題、市内全体での情報提供、情報交換の場の設定などがあげられていた。

学校応援団活動について各教育委員会からの意見。

＊各学校の実情に応じ、学校と地域が連携して活動することが、子供たちのよりよい育成、地域の教育力の向上のために効果的であると考える。

＊学校応援団の組織を充実させるにあたり、地域から学校への支援を待つだけでなく、学校から地域に貢献していく側面も大切だと痛感している。昨年度、文部科学大臣賞を頂いた安行中学校の取組をみると、地域とともに歩む学校側のスタンスが、成功のカギとなっている。

＊各学校ともコーディネーターが中心となり、学校の実状に応じた支援をいただき、大変有難く感謝している。各学校が特色ある教育活動を展開するために、学校応援団の協力は必要不可欠である。今後も質・量ともに充実できるよう、今まで以上に学校と応援団の連携が必要と考える。

＊各学校とも、ふれあい推進長を中心とした学校応援ボランティアの人材確保に努め、学校や地域の特色を生かした取組を実践している。今後、学校応援団活動のよりいっそうの充実を図っていきたい。

＊どの学校の学校応援団も大変協力的に活動している。小学校では登下校の見守り活動、中学校で学習支援活動の実績報告が多い。

＊全ての学校に学校応援団が設置され、各校の実態に応じた取組がなされており、事業が定着している。そのため、今後は活動の充実に視点をあてた取組を考えるとともに、人材発掘・育成に取り組む必要があると考える。

＊厳しい財政状況ではあるが、県の補助金交付については、ぜひ継続していただきたい。

＊学校にとって学校応援団の人材確保が課題と思われるが、各学校の伝統や地域性があり、市として一律に公募するのは難しい。学校における人材確保について、どのように支援するのが効果的か、他の市教委の取組などが知りたい。

＊各学校では学校応援団が組織され、各学校の実態に合わせた特色ある活動が行われている。しかし、各学校の活動にはかなりの差がある現状がある。学校によって求める支援の内容や要望が異なることや、学校応援コーディネーターやボランティアにＰＴＡ関係者が多いため、地域に広まらないことなどがあり、教育委員会がかかわって充実させていくことは、難しさがあることを感じている。

＊各学校それぞれに課題はあるが、学校応援団活動の効果が大きいので解決を図りながら実施している。

＊各校の独自の活動が定着しており、それぞれ成果もあがっている。よりいっそうの活用を促すことで、学校が負担を感じてしまい、本末転倒にならないよう、見守り、支援していきたい。

＊運営に関して、学校ごとの努力に負うところが多分にある。ただし、学校・家庭・地域の連携という観点で効果がある取組であるため、今後も学校と協力しながら応援団の取組を充実させていきたい。

＊各学校により、その取組は様々だが、コーディネーターの力が大きい。また、コーディネーターの人材確保や引継ぎ等にも課題が見られる。特に中学校においては、学習支援は少なく部活動の支援等、支援の仕方が偏った状態がある。市としても、各校の学校応援団の活性化を図るためにも、情報提供や情報交換の機会を設定していきたい。

＊各地区の子どもサポート委員会（学校応援団）の委員長（コーディネーター）は、豊富な人脈や経験でチームをまとめてくれているが、後継者がなかなか育たないのが現状である。

＊本市では、学力向上については学校応援団の取組とは別に「放課後こども教室」や学力向上補助員の取組として対応しています。

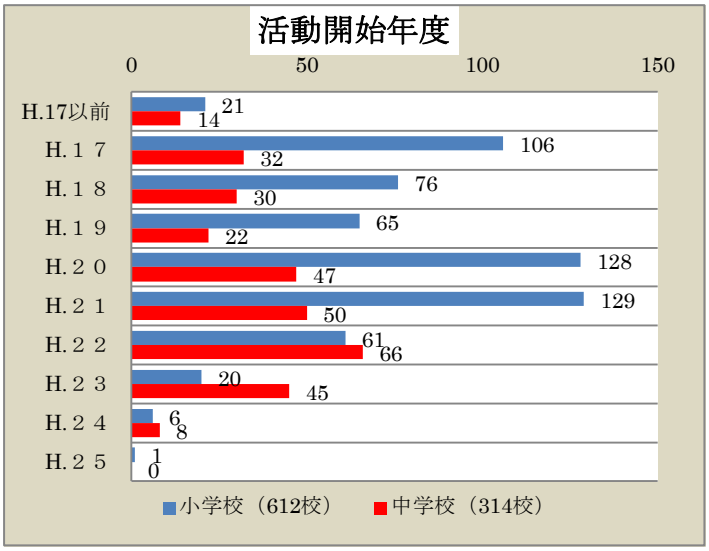
＊ＰＴＡ活動とのバランスのよい連携が難しい。

2　小学校･中学校の取組の調査結果のまとめ

①　学校応援団活動組織

調査７

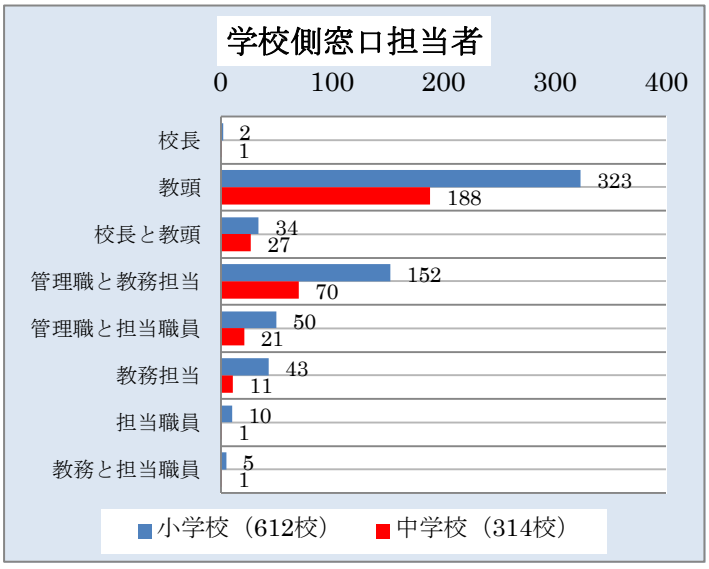
学校応援団の組織・活動開始年度



＊平成２０年度から国が開始した「学校支援地域本部事業」を活用して「学校応援団」を拡充する方針から､「学校応援団を組織し活動を開始した学校が急激に増えている。それ以前から県独自の取組として、県内全小学校の４割弱、中学校で３割弱の学校で「学校応援団」の活動は始まっていた。学校によって活動継続年数は、様々であるが4～6年の学校が多い。活動が軌道に乗り充実してくる年数であり、同時に課題も見えてくる時期であると思われる。新しい考え方や新しい取組を導入するなどして「学校応援団」の充実とさらなる活性化を進めることが求められる。今後、地域が参画して学校を運営するコミュニティスクールへ移行する学校もあると思われる。

調査８

学校応援団の学校側窓口担当者

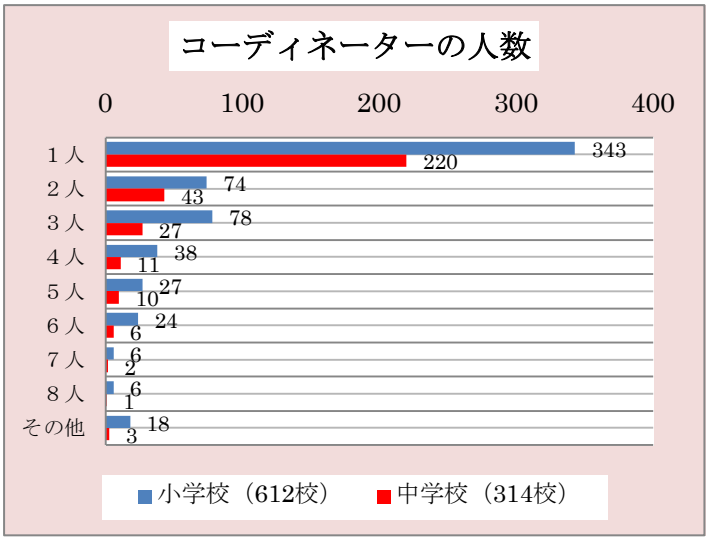


＊学校側の窓口担当者は、ほぼ教頭であり、次に管理職と教務担当と続いている（学校応援団の取組は、教頭の仕事のように見える)｡支援の手順としては、学校でまとめられた、支援してもらいたい内容を学校応援コーディネーターに伝えボランティアとの調整を図りながら支援活動につなげていく形が一般的になっている。学校と応援団をつなぐコーディネーターの役割は非常に重要になってくる。学校に応援団室を作りコーディネーターや支援ボランティアがその部屋に常駐している学校もあり、学校側担当者と応援団との連絡を密にしておくことが大切になる。また、応援団から学校への依頼も考えられることから、常に活動に係る情報は全職員へ伝え共有することが必要になってくる。

② 学校応援コーディネーター

調査９

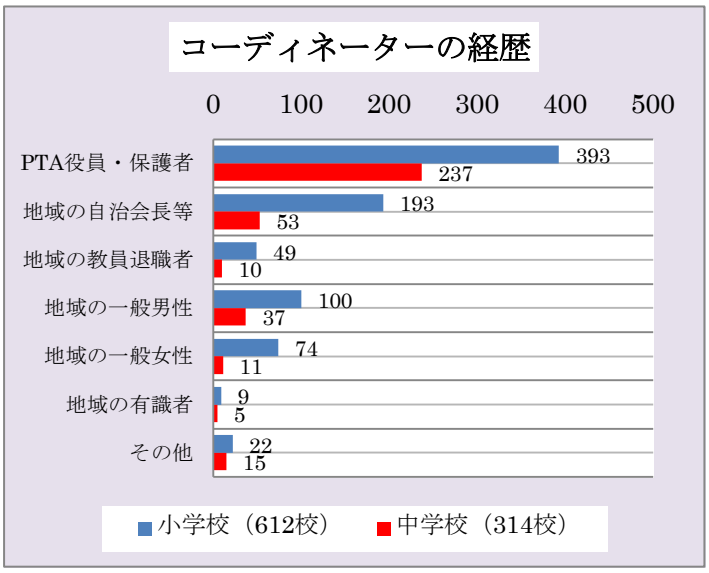
学校応援コーディネーターの人数



＊学校応援コーディネーターは半数以上の学校が一人であることが多い、学校の支援依頼の内容を応援団に伝え円滑に活動できるように調整する役割を持っている。学校と応援団をつなぐコーディネーターの役割の重要性は高い。地域によっては、ふさわしい人材がなかなか見つからない場合も多く、人材確保の問題が課題になっている学校も多い。ある学校では、支援の種類別にボランティアを登録し、その中の代表がコーディネーターを行うようにコーディネーターの複数制をとるなどの工夫をしている。学校をよく知っていることと同時に地域のことも知っている方がコーディネーターを行っている場合が多い。また、場合によっては、学校の内情も知ることがあり学校との信頼関係が大切になってくる。

調査１０

学校応援コーディネーターの経歴



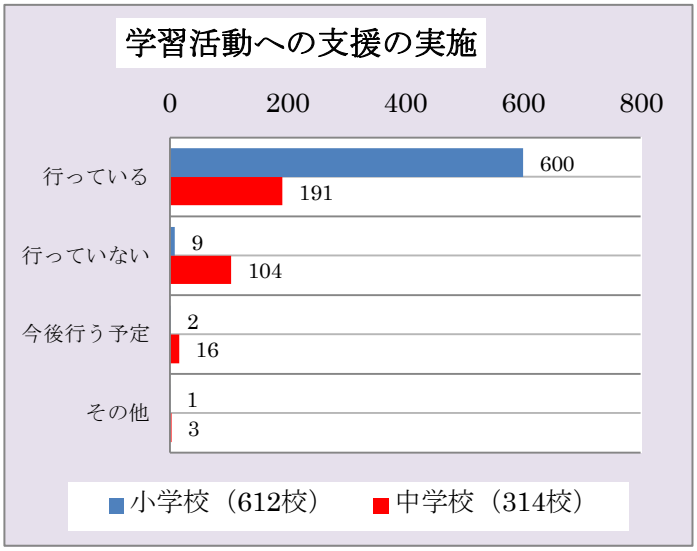
＊学校応援コーディネーターの経歴を見るとその学校のＰＴＡ役員や保護者、元ＰＴＡ会長・役員が多い、次に地域の自治会長等となっている。学校側が依頼しやすい学校関係者（ある程度学校の様子や事情を分かっている方）がコーディネーターになっていることが分かる。

　各学校では、打ち合わせや会議の場所として学校応援団室を作っている。コーディネーターやボランティアが交代で常駐し、通常は、校内の安全のための巡回等を行っているが、いつでも学校の依頼に対応できる体制を作っている学校もある。学校応援団は、コーディネーターを中心としたボランティア組織で、地域住民による学校支援活動であり、無理なくできる時にできることを行うスタンスを守りつつ長く続けることが、地域で子供たちを育てる気運が高まり、同時に地域の教育力の向上につながっていくものである。

③ 学習活動への支援の内容と効果

調査１１

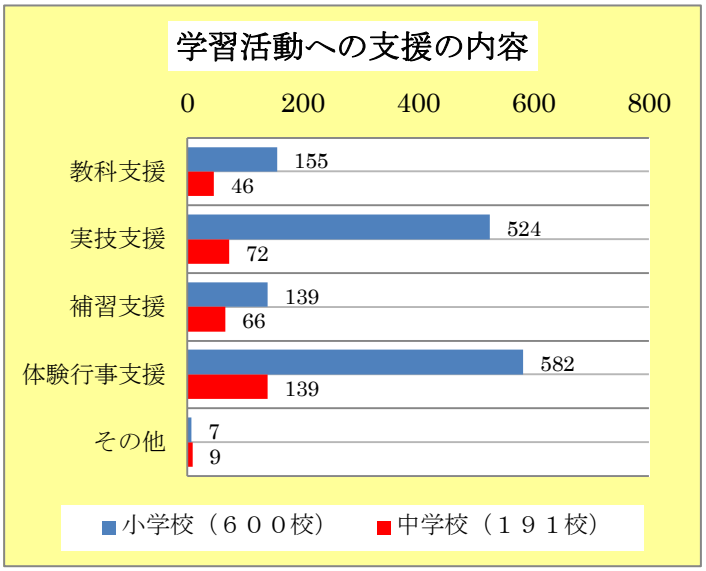
学校応援団による学習活動への支援を行っているか？



＊地域の特色や学校の規模によって学習活動への支援が比較的容易である場合と難しい場合がある。また、教育委員会がある程度の支援をしている市町村もあり、地域や学校の実態を考え工夫した取組が多く見られる。小学校では、ほとんどの学校で学習活動への支援を行っている。その要因として、学校応援団組織がほぼ確立していること、学習内容が基礎的・基本的な内容が多いため学習支援ボランティアが比較的集まりやすいことがあげられる。中学校においては、今後行う予定も含め２００校程度で、全中学校の５７％程度である。中学校の場合、学校応援団の活動年数が浅いこと、学習内容が難しくなっていることで学習支援ボランティアの確保が難しいことなどがあげられる。

調査１２

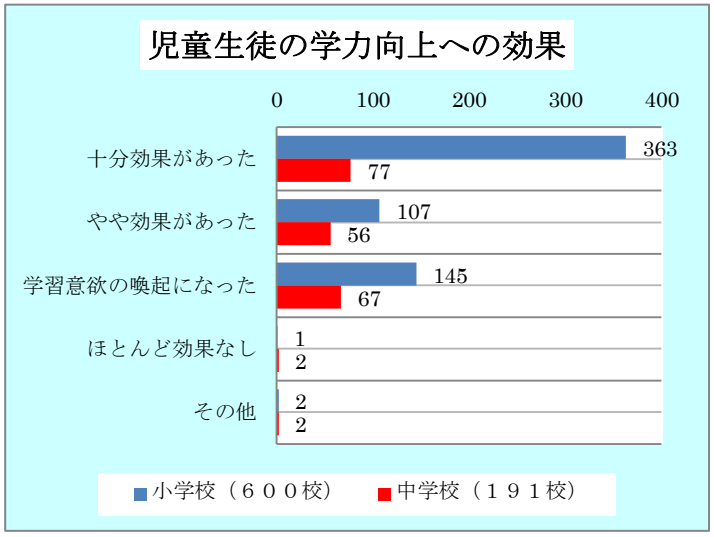
学習活動への支援の内容(複数回答)(タイプ別)



＊学校応援団が行う学習活動への支援の内容をタイプ別に見てみると、小学校は、体験行事への支援と実技教科への支援が大変多く、続いて教科への支援、補習への支援の順になっている。体験行事、実技教科への支援が多くなっているのは学習の効率化や安全面を考慮しての学校からの要望によるところが大きい。また比較的この種の支援ボランティアが確保しやすいことがあげられる。例として、稲作体験等の農業体験や家庭科のミシン実習、調理実習などである。教科、補習への支援については、教室での授業のサポートになることが多く、教員との連携等の難しさから実施している学校数は少なくなっている。中学校もほぼ同じことが言える。ただ中学校での補習への支援が教科の支援を上回っているのは、定期テスト前の補習授業や受験対策の補習授業などへの支援が行われているからである。

調査１３

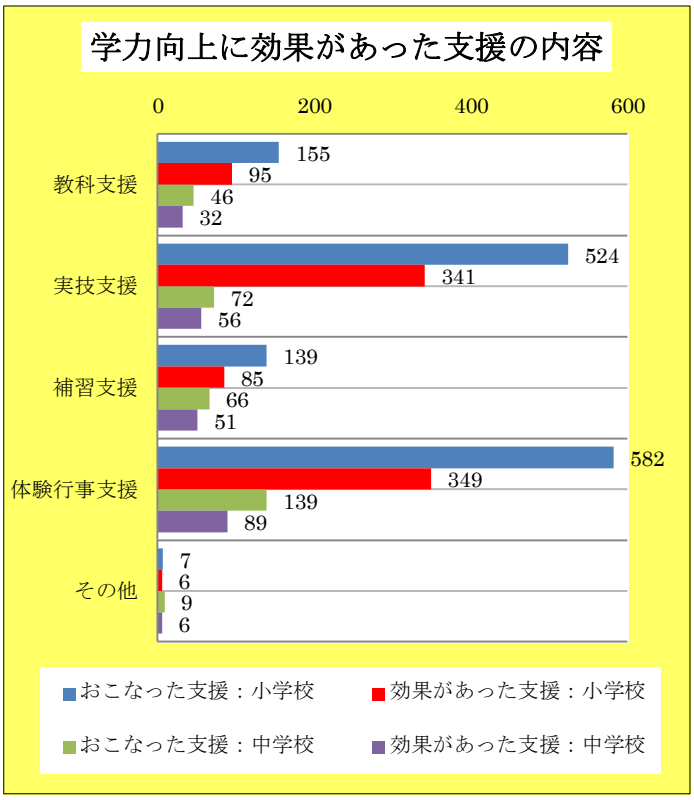
学校応援団の学習活動への支援は、児童生徒の学力向上に効果があったか。



＊学力向上への効果については、何らかの形で効果があると答えている、十分効果があった・やや効果があったを合わせると小学校で４７０校(78.3%)、中学校では１３３校（69.6%）とかなり高い割合で学習への支援が学力向上につながることが分かる。十分効果があった学校の理由として、確認テストの高得点者の割合が増えた、定期テストの平均点が例年に比べ良くなっている等、学習の理解度や定着度が向上していることをあげている。他にも学習意欲が向上した、学習態度が良くなった、学習に対して積極的になった、宿題忘れが減ったなどのプラスの効果があったと答えている学校が多かった。また、実際に学習支援を行ったボランティアからの「勉強が少しできるようになってよかった。」「私たちの活動に少し自信が付いた。」などの感想があったと回答する学校もあった。

調査１４

学力向上に効果があった支援の内容(タイプ別)



＊実際におこなった支援の内容(調査１２)と学力向上に効果があった支援の内容のグラフを一つにまとめ比較した。効果があったと答えている割合を下の表にまとめた。

	小学校	中学校
教科支援	95／155 校 ６１．３％	32／46 校 ６９．６％
実技支援	341／522 校 ６５．１％	56／72 校 ７７．８％
補習支援	85／139 校 ６１．２％	51／66 校 ７７．３％
体験行事支援	349／582 校 ６０．０％	89／139 校 ６４．０％

小学校では、どの支援内容(タイプ)も６割以上の効果率であった。中学校では、実技支援と補習支援が８割近い効果率であった。全体を見ると実際に行った学習活動への支援の内容のタイプに関わらず、それぞれの支援内容について６割以

上の効果があったことが分かる。実際の取組が、学校の実態や特色に合わせた支援の方法であったり、内容であったりしたことがうかがえると同時に、学校と学習支援ボランティアの連携がうまくいっているとも言える。

【具体的に効果があった支援の内容を各学校からの回答のまとめ】

＊学力向上に効果的であった支援の内容（小学校）

ア．教科支援、個別学習支援
イ．放課後、長期休業中の学習支援
ウ．プリント学習のマル付け、掛け算九九の聞き取り等支援
エ．専門家による実技指導（実技等の補助）
オ．伝統文化・芸能等の実技指導
カ．体験活動、総合的な学習の時間の支援
キ．読み聞かせ、読書活動への支援

＊学力向上に効果的であった支援の内容（中学校）

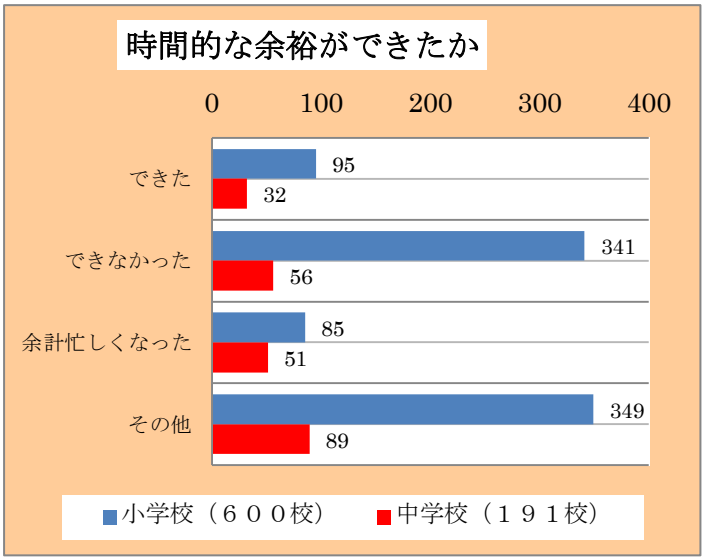
ア．教科支援、個別指導
イ．長期休業中の学習支援
ウ．体験活動の支援
エ．専門家による実技指導
オ．教育講演会、総合的な学習の時間等への支援
カ．読書活動への支援
キ．学校行事、その他の支援

※　各学校からの回答の詳細は、資料３参照

④ 個々への指導の時間の拡充

調査１５

学校応援団による学習活動への支援を行うことによって、学校(教員)に時間的な余裕ができたか



＊学校応援団の活動は、子供たちの学校内での活動を支援する役割と同時に、学習活動の支援として、個別指導などで教員の指導が行き届かない部分のカバーをしてもらったり、簡単な事務処理を手伝うなど教員をサポートする活動も行っている。例えば、宿題やプリント学習の丸付けや提出物のチェック、作品等の掲示等を支援してもらうことによって教員に時間的余裕が生まれ、その結果、教材研究や個別の指導の時間が多く取れる結果となる。調査１６の結果では、時間的余裕ができたと回答した学校は、小・中学校とも約１６％と２割に満たない。余計忙しくなったと答えた学校については、活動年数が浅く学校と応援団との歯車がうまくかみ合っていないようである。学校応援団の活動の趣旨と目的の理解や支援内容の見直しなどの必要がある。質問の内容の解釈の違いから「その他」と答えた学校が多くなってしまった。

その他の内容

＊時間的な余裕ではなく人手が増えた分、教育活動の質的な保証ができた。
＊多くの方に学習状況を見て頂くことで、一人に関る時間が長くなり、学力向上につながっている。
＊つまずいている児童の補助や丸付けを行い担任が指導に当たる時間が増えるので児童の学力が向上すると考える。
＊時間的な余裕にはならないが、一人一人へのきめ細かい指導、遅れがちな児童への援助が非常にできる場面が増えた。
＊時間的な面よりは、指導・支援の上で十分、個に応じることができるよさがある。
＊授業において、ボランティアの支援を受けることで、担任が子供と関わる時間が増えた。
＊時間的にはあまり変わりはないが、一人一人に目が行き届き教育内容が充実した。
＊時間的には変わらないが、指導が充実した。
＊時間的な余裕を持たせるための目的でなく、児童の学びや体験に必要なので支援を行う。
＊時間的な余裕と言うより、実技に関することは、教師にとっても学ぶことが多い。また、丸付けをしていただくことで、個別の指導に時間が使える。
＊時間的余裕より、学習内容の充実が図れた。　＊安全面の補助支援が充実した。
＊余裕ができた面と忙しくなった面がある。　＊ケースバイケースで、一概には言えない。
＊打ち合わせ等で時間はとられるが、子供への指導は充実する。

＊児童にとってプラスの効果はあるが、学校における時間的な余裕にはつながっていない。
＊時間的には、ほぼ変わらない。
＊支援により時間的な余裕ができた体験活動もあった。
＊学習活動によって、余裕ができたものとそうでないものがある。
＊授業中は児童と向き合う時間が確保され、余裕をもって学習を進められるが、事前の打ち合わせを行うことで忙しくなる場合もある。また、控え室の準備や接待で忙しくなることもある。
＊余計忙しくなったということはないが、学校応援団との事前の打ち合わせ、コーディネーターとの連絡調整等の時間が必要になった。教職員と地域の方々との交流が深まり教職員自身の研修になり活動を深めることができた。
＊支援していただく内容によって異なるので，どちらともいえない。
＊引き継ぎや準備の時間がとれにくい面がある
＊どちらともいえない。応援団の学習支援により教師の児童個々に対応する時間的余裕は生まれるが、共に協力して指導支援するための応援団との連携打ち合わせが重要となる。
＊時間的な余裕ができる場合と、反対に対応で時間がなくなる場合があった。
＊学習内容の負担軽減にはなるが、準備連絡等で時間が必要となる。
＊仕事の負担を減らすとか時間的余裕を出すという考えには反対で、ともに児童の指導に当たるという考えで行っている。打合せも念入りにやっている。
＊初期には、忙しくなったが、現状はそれほどでもない。しかし、時間的余裕ができたというほどではない。（そもそも、学校応援団は「余裕を作る」ことを目指してはいないと思います。）

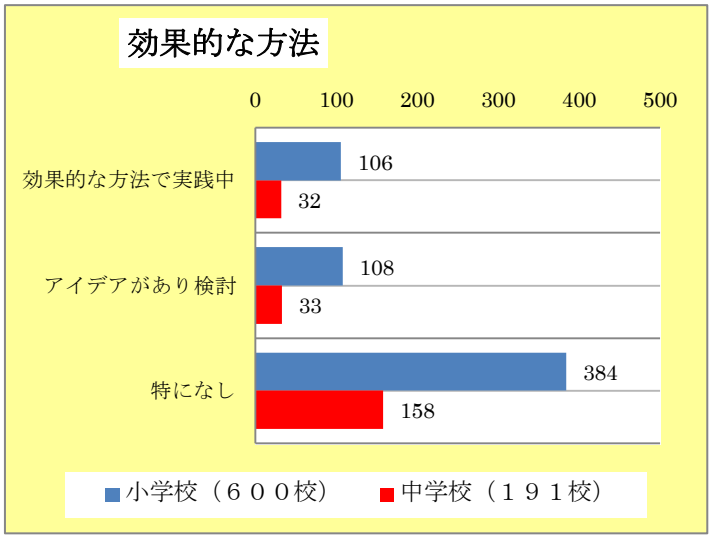
【地域とともに歩む学校づくりセミナー】
「県立総合教育センター
生涯学習推進担当研修会から」

埼玉県のマスコット「コバトン」

⑤ 学校が考える効果的な学習活動への支援内容

調査１６

学校応援団による学習活動への支援の内容で児童生徒の学力向上につながる効果的な方法。



＊各学校で行われてきた学力向上に効果的な支援の内容や方法など他の学校との情報交換等で共有し、自分の学校で取り組めそうな内容・方法を工夫しオリジナルとして実践していくことも今後必要になってくる。子供たちの学力向上に効果的な支援の内容と今後活動予定の支援の内容・方法など各学校からの回答をまとめた。

効果的な方法とアイデア

1．教科支援、個別支援

＊少人数指導に学習支援者を加えることで、課題や進み方のスモールステップ化が進み、理解が不十分な生徒の基礎基本の習得が飛躍的に進んだ。

＊学習課題を与え、指導するだけでなく、家庭学習の方法について細かいアドバイスをし、学習が継続的なものになるようにした。

＊多くの応援団が参加することで個別指導が可能になった。（個別指導体制が取れるような人数確保）

＊通常授業での個別指導の支援（特に努力を要する生徒）は、効果がある。

＊基礎・基本の定着を図るための個別指導、綿密な打ち合わせによる個に応じた支援

＊地域の中で、すでに教員をご退職された方に、学習支援ボランティアとして特に放課後や長期休業中の補習等で講師になっていただき学習支援を行っていただく。

＊国語と数学の内容を中心に、基礎的・基本的な内容に絞って実施する。

＊英語のノート・プリントの丸付け、アドバイスの記入をしてもらっています。

＊プリントの丸付けを子供が見ている前ですると学力向上の意欲に繋がる。

効果的な方法とアイデア

２．放課後、長期休業中等の補習

＊長期休業中の生徒への補習学習・補習授業の指導者の確保。
＊昼休みや放課後、長期休業中の補習を地道にコツコツと積み上げるしかないと考え取り組んでいる。
＊寺子屋学習の実施（地区勤労福祉センターおいて、定期テスト前の土曜日に年間５回）
＊部活動のない日の放課後を活用し、空き教室を開放して、保護者・学生に協力してもらい下校時間まで学習支援の時間をつくる。
＊学習室において、学習コーナーとして資料など整理し、準備するなどして活用しやすい環境を提供し放課後の学習室での個別学習支援を実施する。
＊教科の授業への個別指導及び月～金の放課後、土曜日や長期休業中の学習支援について検討中。

３．専門家による学習支援、実技指導

＊伝統芸能を学ぶことにより、記憶力・思考力を高めることができる。
＊専門的分野の教授、教員への支援。地域の専門家（書道、ミシン、芸術）による直接指導。
＊地元の体育連盟や団体を活用し実技指導の師範と支援、特に柔道は、安全面の指導からも効果がある。
＊実技指導は、プロの技と作品をその目で見られることとプロの指導が有効である。
＊音楽の授業に地元の箏曲・尺八の演奏者を招いて、模範演奏や演奏指導を行った。
＊伝統継承においてお囃子、太鼓の体験学習の指導を地域の方にお願いしている。

４．人材確保

＊卒業生(高校・大学生）の活用、退職教員の活用。
＊教育実習終了者、予定者の学生を活用。
＊次年度の教育実習生を応援団員に登録し、年間５回土曜日等に生徒の学習支援に加わってもらった。
＊本校卒業生で教育実習生を学校応援団として、学習ボランティアを依頼する。
＊教育実習生による学習支援（年齢が近く質問等しやすい雰囲気で活動できる）
＊学習応援団には本年度及び来年度の教育実習生になってもらっている。
＊教育実習生やスチューデントインターシップを経験した学生を応援団として、継続して授業補助にあたらせる。

効果的な方法とアイデア

５．教育講演会、総合的な学習の時間、体験活動等への支援

＊地域の方を講師に、体験的活動を取り入れている。
＊福祉・ボランティア活動など
＊地域の消防団と連携した防災訓練
＊隣接する県立施設（加須げんきプラザ）のコーディネートによる体験学習
＊学校応援団やＰＴＡの協力の下、体験学習の稲作に取り組んでいる。
＊学校応援団による「ふれあい講演会への保護者参加の呼びかけ」を通して、親子の進路決定に向けた話し合いの機会を広げていきたい。
＊講演会等で、講師と生徒の対話の機会を積極的にもったり、学校応援団の方々と積極的にグループディスカッションを行ったりして、考え方を広げ、深める取組を行っている。

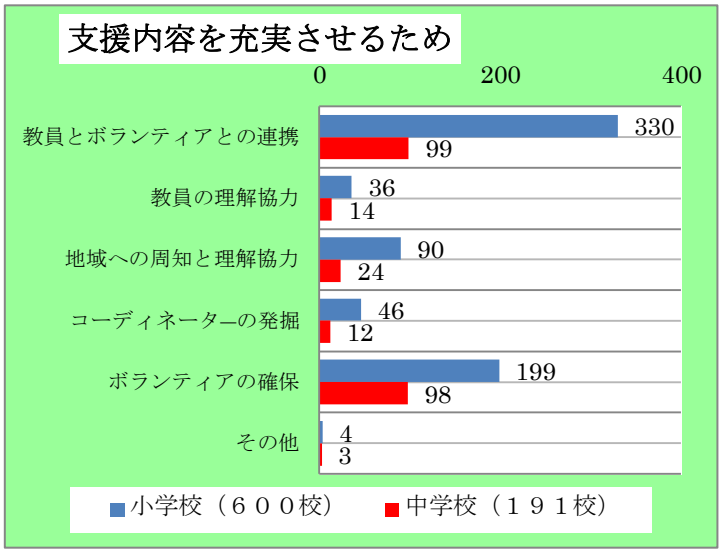
６．その他

＊大学との連携。
＊近隣大学（城西大学、東京電気大学、大東文化大学）のサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業と自校の学校応援団活動と連携させる。
＊地域の学校支援活動を紹介する地域連携通信を今後も継続発行し、地域住民の学習支援の実際と成果等を紹介する。
＊他校の実践から学びながら、応援団の積極的な有効活用を模索中です。
＊資格試験（漢字検定等）の支援。
＊深谷市チャレンジの取組を参考に、学校の実態に合わせた級をもうけて取り組ませる。
＊学習活動の振り返りを見届け、意欲の喚起につなげる。

⑥ 学習活動への支援の継続と内容の充実

調査１７

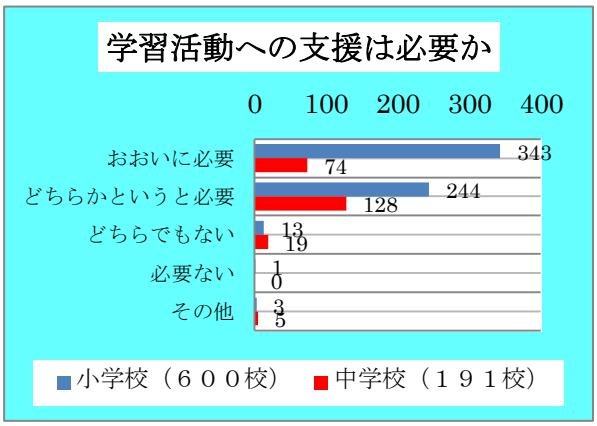
学習活動への支援を継続し内容の充実を図るために重要なこと。



＊今後、学習活動への支援を充実させるためには、直接教員や子供たちと向き合う学習支援ボランティアの存在が大変重要になってくる。特に学校側の配慮として快く活動に参加していただける体制を整える事と子供たちも含め感謝の気持ちを忘れないことが大切である。また、調査結果にもあるように、活動の目的を理解した上での教員と学習支援ボランティア相互の連携・協力が不可欠である。学校応援団の活動を維持していくための課題ともなっている支援ボランティアの人材確保も重要であり、特に学習支援ボランティアの人材確保は、難しい傾向にある。そのためにも地域へ応援団のことを積極的に発信し、ボランティアとして協力していただける方を確保していくことが必要になってくる。

調査１８

児童生徒の学力向上に学校応援団学習活動への支援は必要ですか。



＊ほぼ全ての学校が、学校応援団の学習活動への支援は、必要であると回答している。子供たちの安全上の問題から学校は、閉鎖的になったことがあり、地域や保護者からは、学校で何が起きているのか分からない状況に一時期なってしまった。学力低下や学校不信、不登校等の問題も学校が閉鎖的になったことが一つの要因でもあったと思う。また、いじめによる自殺の問題、教員の体罰の問題など大きな社会問題にまで発展している現在、学校応援団の取組は、このような問題の解決に向けた手段の一つであると言えるのではないだろか、「子供は、家庭でしつけ、学校で学び、地域で育てる」と言われるように、学校・家庭・地域が一体となった取組が少しずつ浸透して、その結果が良い方向に出ていることを実感できる。だからこそ学習活動の支援のみならず、学校応援団の活動全体が受け入れられる取組になっていると思われる。学習活動の支援が必要と回答する学校がほとんどであるという調査結果は、学校応援団による学習活動への支援は、子供たちの学力向上に有効であると言える。

Ⅶ　まとめ

調査結果では、実技教科の支援や補習支援での効果が大きいことが読み取れるが、一般的に様々な体験や自然体験が多い子供ほど学力が高い傾向にあるなど、体験活動と学力には相関関係があると言われていることから、体験活動・行事への支援も効果が大きいと考える。これは体で実際に動き、体験することが理解を早めたり、深めたりすることができることを意味しているのではないかと思う。学校応援団の活動は、子供たちの実体験を豊かにし、教員、家族以外の大人とのコミュニケーションの機会を増やす。このことが生活意欲や学習に対する興味関心、学習意欲を高め、学力向上につながる結果になっていると思われる。また、個別指導による学習支援の効果は、教員以外の先生になる方（地域の、となりのお兄さん・近所のおじいちゃん）の個別指導が、子供にとって新鮮で、学習意欲の喚起につながる結果になっていると考える。各学校によって、どのような支援を依頼するかは、その学校の実情や地域の特色により様々であり、学校応援団員である学校支援ボランティアのメンバー構成によっては、できる支援も限定されてくる。学校支援ボランティアの人材確保は、どこの学校でも課題となっているが、地域の特色や学校の実情によって支援の内容を選択し活動を工夫することが今後の応援団活動の継続、充実の鍵になると言える。地域の方たちの多くは、学校へ協力的で、そのような方たちに学校応援団ボランティアメンバーとして登録していただくことが必要であり、学校と応援団をつなぐコーディネーターの役割は、極めて重要になると言える。

学校応援団の学習活動への支援の効果

１学校応援団の学習活動への支援は、
**　子供たちの学力向上に効果がある。**
２学習の効率化と個別指導が充実する。
３地域の教育資源を有効活用できる。
**　（人材・施設等）**

課題

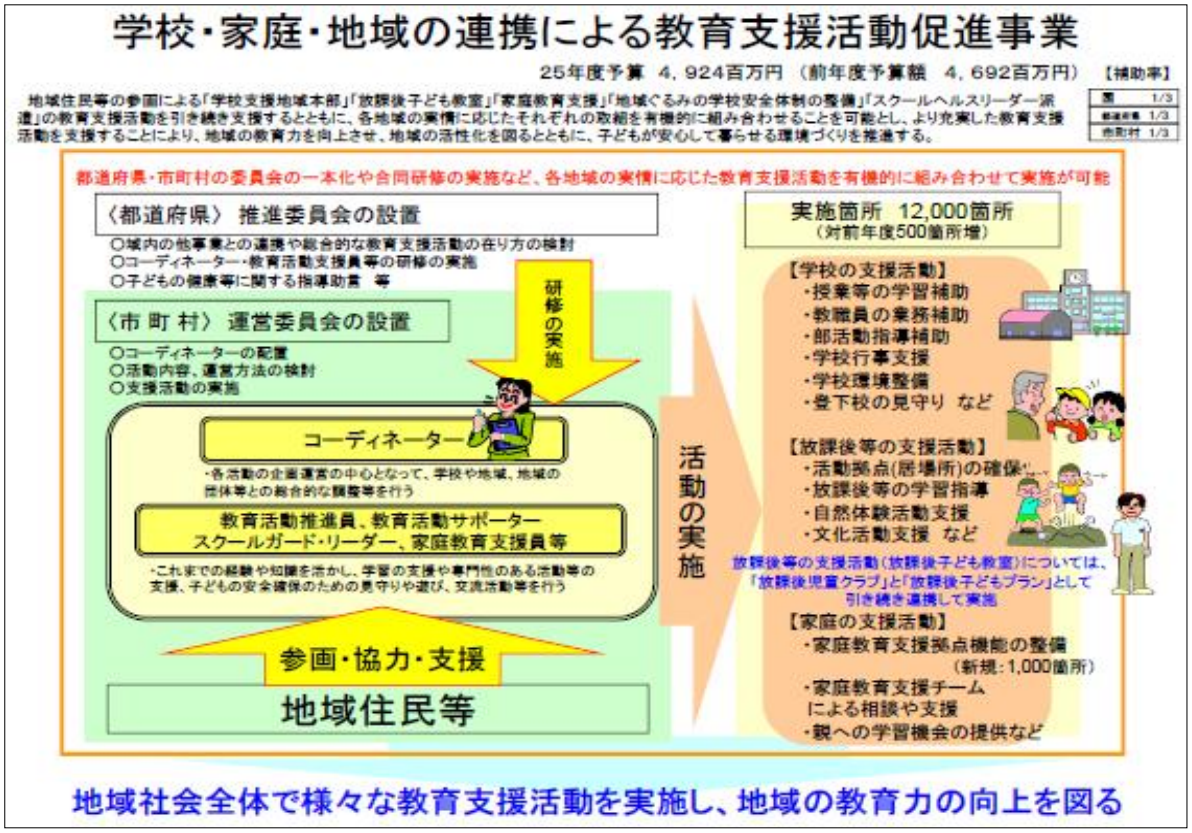
１学習ボランティアの人員確保
２教員の指導力向上（授業力）
３学校と応援団の協力体制の確立。

【読書活動推進講座　読み聞かせ編】
「総合教育センター
生涯学習推進担当研修会から」

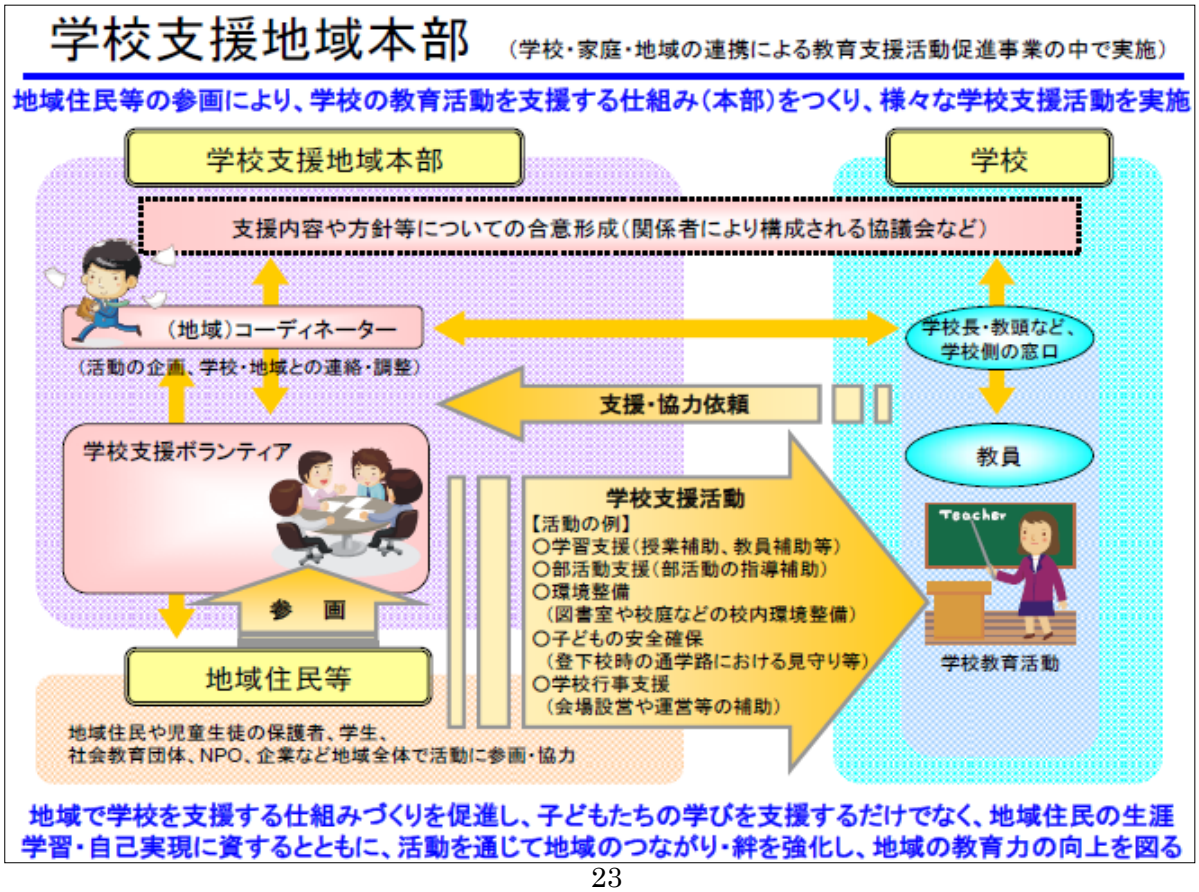
資料編

資料１

【文部科学省　学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業イメージ図】



【文部科学省　学校支援地域本部事業イメージ図】



資料２

学校応援団活動への支援に係るアンケート調査（教育委員会用）

学校応援団活動への支援に係るアンケート調査（**市町村教育委員会用**）

県立総合教育センター　生涯学習推進担当

＊回答は、すべて回答シートへご記入ください。
＊回答シートの該当する欄に１を入れ、具体的記入欄には簡潔に文章でお答えください。

問１　学校応援団を担当している部署はどこですか。

記入例：教育委員会　生涯学習課　社会教育担当

（　　）

問２　教育委員会、学校、応援団代表（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）による三者での協議会組織等があり合同会議等を行っていますか。

ア　はい　（名称：　　）

イ　いいえ

ウ　組織はないが合同会議を実施している。（情報提供、情報交換等）

エ　その他　（　　）例：取組発表会、報告会

問３　学校応援団組織づくりや活動開始時における、教育委員会の関わり方を教えてください。

ア　各学校と協力して応援団を立ち上げ活動を始めた。

イ　教育委員会でコーディネーターや学校ボランティア等を公募した。

ウ　教育委員会からコーディネーター等を紹介した。

エ　学校応援団について説明し、学校独自の取組に任せた。

オ　その他（　　）

問４　各学校の学習活動の支援の取組は、児童・生徒の学力向上に効果がありますか。

ア　学力向上に直接つながり、大変効果的である。

イ　学習活動の支援の方法、内容、支援者によって、効果は様々である。

ウ　間接的であるが、学習意欲の喚起等につながっている。

エ　学力向上には、あまり効果が見られない。

オ　その他（　　）

問５　学校応援団の学習活動への支援の内容として、児童・生徒の学力向上に最も有効だと考えるものを１つだけ選んでください。

ア　個別の学習支援（学習が遅れ気味の子供への授業での個別の支援）

イ　放課後や長期休業中の補習による個別の学習支援。

ウ　ゲストティーチャーによる授業の支援。

エ　有識者による学習講演会の支援。

オ　実験・実習の補助的支援。

カ　その他（　　）

問６　学校応援団の活動によって、学校と地域がより良い関係になっていますか。（地域からの苦情が減った。児童・生徒が変わった。地域が学校に協力的になった。等）

ア　活動前もよい関係であったが、いっそう良い関係になっている。

イ　活動前と比べるとよい関係になっている。

ウ　活動前とあまり変わらない。

エ　活動前よりうまくいっていない、悪くなっている。

オ　その他（　　）

問７　教育委員会として、今後の学校応援団活動の充実に向けて、各学校に対してどのような支援が必要ですか。（複数回答可）

ア　コーディネーターの推薦、紹介。ボランティアの公募など人材確保の協力。

イ　活動資金等の補助。

ウ　地域や市町村全体への周知、協力依頼の広報。

エ　地域の企業、商工会、公民館や社会教育施設との連携の仲介。

オ　その他（　　）

問８　学校応援団の活動について、教育委員会として、御意見等ありましたらお書きください。

以上ご協力ありがとうございました。

学校応援団の学習支援に係るアンケート調査（小・中学校用）

学校応援団による学習活動への支援に係るアンケート調査（**小・中学校用**）

県立総合教育センター　生涯学習推進担当

＊回答できるものだけお答えください。
＊学校名と回答される方の職名と氏名を御記入ください。（回答シートに記入）
＊回答シートの該当する欄に１を入れ、具体的記入欄には簡潔に文章でお答えください。

問１　学校応援団を組織し活動を開始した年度をお答えください。

ア　平成１７年度　　イ　平成１８年度　　ウ　平成１９年度
エ　平成２０年度　　オ　平成２１年度　　カ　平成２２年度
キ　平成２３年度　　ク　平成２４年度　　ケ　その他（　　）

問２　学校応援団の学校側窓口（担当）はどなたですか？

ア　校長　　イ　教頭　　ウ　校長と教頭
エ　管理職と教務担当　　オ　管理職と担当職員　　カ　教務担当
キ　担当職員　　ク　教務と担当職員　　ケ　その他（　　）

問３　学校応援団コーディネーターについてお答えください。

①コーディネーターは、現在何名ですか？

ア　１人　　イ　２人　　ウ　３人　　エ　４人　　オ　５人　　カ　６人
キ　その他（　　）

②コーディネーターは、どのように決定しましたか。

ア　教育委員会や学校からの公募　　イ　地域からの紹介や推薦
ウ　地域の情報から学校で指名・依頼　　エ　PTA 役員、保護者からの紹介や推薦
オ　その他（　　）

③コーディネーターは、どのような経歴の方ですか。（複数回答可）

ア　地域の自治会長等　　イ　地域の元教員等　　ウ　PTA 役員、保護者
エ　地域の一般男性　　オ　地域の一般女性　　カ　地域の有識者（大学教授や研究者等）
キ　その他（　　）

問４　学校応援団による学習活動への支援を行っていますか？

ア　はい　　イ　いいえ　　ウ　今後活動予定

エ　その他（　　）

問５　問４で　ア　はい　または　ウ　今後活動予定　と答えた学校にお尋ねします。

学習活動への支援の内容（活動予定）をお答えください。（複数回答可）

ア　教科支援タイプ（漢字、計算等の学習支援、個別支援等）

イ　実技支援タイプ（調理実習やミシン指導等実技教科の補助、伝統芸能の指導）

ウ　補習支援タイプ（長期休業中の学習支援、週休日等の補習授業）

エ　体験・行事支援タイプ（体験活動への支援、運動会への支援、読み聞かせ等）

オ　その他（　　）

（教育局市町村支援部家庭地域連携課「学校応援団」に係る参考資料
学校応援団のタイプ別活動例より）

問６　学習活動への支援の効果についてお答えください

①　学校応援団による学習活動への支援は、児童・生徒の学力向上に効果がありましたか？

ア　十分効果があった　　イ　やや効果があった　　ウ　学習意欲の喚起になった

エ　ほとんど効果はなかった　　オ　その他（　　）

②　学力向上に効果があった学習活動への支援は、どのタイプですか？

ア　教科支援タイプ　　イ　実技支援タイプ　　ウ　補習支援タイプ

エ　体験・行事タイプ　　オ　その他（　　）

＊簡単にその具体的内容をお書きください。

③　児童・生徒の学力向上に、学校応援団の学習活動への支援は必要ですか？

ア　おおいに必要　　イ　どちらかというと必要　　ウ　どちらでもよい

エ　必要ない　　オ　その他（　　）

問７　学校応援団による学習活動への支援を行うことによって学校（教員）に時間的な余裕ができましたか？

ア　はい　　イ　いいえ　　ウ　余計忙しくなった

エ　その他（　　）

問８　学校応援団による学習活動への支援の内容（方法）で、児童・生徒の学力向上につながる効果的な方法（アイデア）等がありますか。

ア　効果的な方法があり実践中　　イ　アイデアがあり検討中　　ウ　特にない

＊ア、イの内容を簡単にお書きください

問９　今後、学校応援団による学習活動への支援を継続させ内容の充実を図るには何が一番重要ですか？

ア　教師と学習活動支援ボランティアとの連携　　イ　教員への理解・協力

ウ　応援団活動の地域への周知と理解・協力　　エ　コーディネーターの発掘

オ　学習活動支援ボランティアの確保　　カ　その他（　　）

問１０自校で行っている、学校応援団による学習活動への支援の実践例を今回の調査・研究の資料として、ご提供いただけますか。

ア　進んで提供したい　　イ　提供できる　　ウ　提供しない（できない）

エ　その他（　　）

以上、御協力ありがとうございました。

資料３

＊学力向上に効果的であった支援の内容

ア．教科支援、個別学習支援

＊算数、国語学習のつまずきに対する指導。
＊教科等の授業における学習支援、個別支援、実技支援。
＊漢字・計算の個別支援・外国語活動学習支援。
＊年間 140 回を超える算数教室を実施し、繰り返し学習させることで基礎的な学習内容の定着が図られた。
＊進度の遅れがちな子への個別支援が可能になり、学習内容の定着が図られた。
＊理科の授業支援で、実験や観察等、個々の児童に対して、細やかな指導ができた。
＊理科支援員の実験等の支援で，児童が思考する時間を十分取れるようになった。実験用具の準備、整理整頓等を行うことができ、授業内容の充実を図ることができた。
＊低学年では、理解力に差が生じていて、朝の基礎学習の時間などでは、時間が短く教師が細かく見てあげることができない。そのため、応援団の方が、早く進んでしまう児童にかかわることで、担任教師がつまずいている児童に関わることができ、児童は落ち着いて学習することができた。
＊指導者の数が増える事で、多くの児童の個別の支援ができたので学力向上に効果があったと思われる。
＊指導側に多くの人員がいることによって、個別の支援の充実を図ることができる。
＊外国語活動で、AET と協力し、グループ活動（会話）を支援している。
＊外国語活動の支援（教材作成、校内掲示など)。
＊指示に従って学習を進めることが困難な児童に対する支援。
＊授業でのつまずきに対して細かい支援を行うことで、学力が向上した。
＊講師が腹話術を使って、講師と人形が会話する形式で道徳授業を行う。
＊外国籍の児童（アジア地区）が、7 名在籍している。言語の壁が、日常生活に影響している現状である。児童に安心感を与え、集団適応を図る支援を継続することができる。
＊学習支援員の参加が、一人一人へのきめ細やかな指導につながり、児童の学習意欲につながった。また安全な学習活動ができた。

イ．プリント学習の丸付け、掛け算九九の聞き取り等

＊業前の朝学習では、ボランティアの方に採点をしていただいている。教諭は個別指導をしている。個別指導によって学力の向上に役立っている。
＊放課後の補習学習で丸付けや指導を実施してもらった。
＊1 クラスに 10 人程度のボランティアに入ってもらい，計算問題の丸付けとアドバイスをしてもらい，定着を図った。

ウ．放課後、長期休業中の学習支援

＊夏季休業中のサマースクールや放課後教室での個別指導。１学期の復習を実施。

＊夏休みに公民館等を借り、地区ごとに学習会を開く事で地域の方々との交流が深まった。夏季休業日の算数教室補習支援。マンツーマンに近い形で対応できたため、児童の課題を的確に把握し具体的に指導することができ、計算力が向上した。

＊サタデースクール（英語)、囲碁・将棋、フラワーアレンジメント、スクラップブッキング。

＊放課後や長期休業中の補習学習の支援。

＊市独自の施策である放課後の補習授業に､ボランティア講師として学校応援団の方にご協力をいただいている。

＊支援の方々のおかげで、聞く態度が育っている。

エ．専門家による実技指導（実技等の補助）

＊５、６年生の家庭科の授業でエプロン・トートバックを製作する際にミシン学習の補助ボランティアをお願いしたところ、たくさんの方のお手伝いをいただき、全員が無事完成できた。

＊ミシンや算盤を使った授業等で個別支援が可能になり、一人一人の操作技能が高まった。

＊調理実習やミシン指導、アイロンのかけ方等では個別指導の補助をして頂けるので、子供たちの技能の上達が早い。生活の中での技術を身につけることができた。

＊個々に応じた実技指導により、子供たちは確実に技能を身に付けることができた。

＊ミシン学習では班ごとに応援団がついたことで、細かな指導と安全面の配慮ができた。

＊実技指導で担当教師だけでは、十分に指導しきれない部分について細かく指導していただけた。

＊高学年家庭科裁縫において、ミシンの補助に入ってくださり、個に応じた支援を行うことができ、児童が満足できる作品を仕上げることができた。

＊家庭科の実技を支援していただく中で、子供たちの技能が伸びることはもちろん、どうやればうまくできるかなど思考力を伸ばすことができる。

＊大学生のボランティアに定期的に来ていただいたことで、児童に対して継続的な支援ができた。

＊２年生体育の鉄棒の授業では逆上がりの指導の補助をお願いし、逆上がりのできる児童が増えた。

＊専門の先生に理科の体験活動を支援してもらうことで、理科に興味・関心を持つ児童が増えた。

＊初心者が半数以上だったので、金管クラブの指導に専門の方に来て頂いた。おかげで、地域の演奏会や管楽器演奏会などで、難易度の高い曲を演奏することができた。

＊３年生図工の授業で、大工を職種としている人たちに、釘打ちの指導をしてもらう等、教員ではできない専門的な技術指導をしてもらう事により、児童の学習への喚起と技術の習得につながった。

＊音楽会の楽器パート練習で個別指導をいただき、自信を持ってできるようになった子が多く、学習効果が上がった。歌唱、楽器の技能指導。

＊郷土料理への興味関心などを持たせるために、知識のある方の支援により、子供たちの学ぼうとする意欲が高まった。

＊書写の授業補助、書き初め指導、書き初め選手練習会指導。

オ．伝統文化・芸能等の実技指導

＊伝統芸能体験（獅子舞）を地域の保存会の方に指導していただいている。

＊伝統音楽を指導して頂き、発表することで子供たちの自信につながっている。

＊伝統芸能楽器演奏支援。

＊郷土芸能を指導して頂くと同時に、地域の歴史の学習にもなるようなお話をお願いしている。

カ．体験活動、総合的な学習の時間の支援

＊米作り体験(５年)では、田植機やコンバインに一人一人が乗せてもらい、近代的農作業も体験できた。

＊５年総合学習において、和太鼓、茶道などの体験活動の指導をしていただき、日本の伝統文化に触れることができた。

＊総合的な学習の時間、米作りについて学習する中で、田植えや稲刈りを学校応援団の方々に指導していただくことで体験の伴った学習展開ができ、児童の学習意欲が高まった。

＊体験的な学習活動への支援において、児童と学校応援団の方々との関わりが増え、児童のコミュニケーション能力の育成や、言語活動の充実が図られた。

＊低学年生活科の調理（さつまいもの収穫パーティー）補助。６年総合的な学習の時間日本文化体験ゲストティーチャーの支援。

＊米作りで、具体的な体験（田植え、稲刈り等）ができ、主体的な活動につながった。

＊通常体験することが難しいと思われる「大豆を使って豆腐作りをする」の学習などにより児童の興味関心が深まり効果的であった。

＊６年総合的な学習の時間：日本の伝統文化に関する体験活動を行う。内容は、和太鼓に接する体験、お茶、生け花の体験、うどん打ちの体験を児童の希望に応じて行う。

＊総合的な学習の時間において、「ミニりゅうせいまつりをしよう」（３年）で龍勢保存会の人たちにご指導いただくことによって、より本物に近づくことができる。

＊市の特産物である「なし」をテーマにして、総合的な学習の時間に梨経営者の協力のもと、受粉・摘果・袋かけ・収穫までの一連の作業体験を実施した。

＊火おこし、洗濯体験、農業体験、ものづくり体験、名人に学ぶ等（地域の人と交流することにより心が豊かになり、昔のくらしを具体的にイメージしやすくなった)。

＊米の籾蒔きから収穫までの体験学習。稲作・餅つきの体験活動。宿泊体験学習での支援。

＊３年の社会科と総合的な学習の時間に「F ねぎ」の栽培体験に取り組んでいる。学校応援団「○○小ねぎ栽培プロジェクト（ＦＮＮＰ)」の支援のもと「定植・草取り・収穫・調理」等の体験を通して、F 市の特産物である「F ねぎ」の特徴や栽培について学び、地域社会に対する誇りが生まれている。

＊栽培体験活動を通して、生活科・食育指導に効果があった。

キ．読み聞かせ、読書活動

＊地域の読み聞かせボランティアの活動は児童の読書意欲を喚起し、様々なジャンルの本を読むようになり、読書に対する興味・関心が高まった。また、聞く能力の向上にもつながっている。

＊定期的な読み聞かせにより読書に親しむ児童が増え、学習教材に対する理解が深まった。

＊読み聞かせを定期的に行うことで、読書活動が盛んになり、国語が好きな児童が増えた。

＊国語力の基盤となる言語能力の育成及び読書への誘いに効果がある。児童向け新聞を提供いただくことにより、学習意欲を喚起すると共に、知識を身に付けることができた。

＊読み聞かせにより読書好きの子を育てる事が、表現力や読解力の育成につながっている。

＊お話玉手箱（全学年対象の国語学習支援ボランティアで、読み聞かせを劇化する等して読書への関心を高めようとする取組）によって、児童の読書への興味関心が高まった。（読書量増加による思考力の向上に役立つ。言語への興味関心が高まる）。

＊朝の読み聞かせにおいて、様々な図書を紹介する機会となり、集中力を高めるとともに、読書への興味関心を広げることができた。

＊読み聞かせを行うことで、特に低学年の本への関心が高く、図書室利用の割合が増えている。「聞く・読む」等、少しずつ向上がみられることから効果が出ていると考える。

＊読み聞かせ活動や図書室の読書環境の充実により、言葉に対する興味・関心が高まったり読書に意欲的に取り組んだりするようになった。

埼玉県のマスコット
コバトン

＊学力向上に効果的であった支援の内容（中学校）

ア．教科支援、個別指導

＊学習支援を受けている教科は、経年変化で、各種学力調査結果が向上している。
＊学習に戸惑っている生徒への個別支援により、数学の学力向上に結びついた生徒がいた。
＊個別支援を行い、数学や理科などの基礎的内容の習得に効果があった。
＊4 人の生徒に一日一時間の別室による日本語・学習支援を行っている。
＊個別に十分な時間をとって支援されることにより子供たちの学習への意欲が高まった。
＊授業に遅れている生徒を T･T の形で支援に入っている。また、日本語が十分に話せない外国籍の生徒にも、放課後短い時間(勤務時間の関係）ですが補習等行っている。
＊理解が遅い生徒に対しての個別支援や指導を授業中にできるので、全体の授業に影響を出さないで理解度を高めることができる。
＊学校応援団に加入する地域住民が授業参観し、その中で、学習支援の必要な生徒への助言、授業者との連携等、つまずきの早期発見に効果を得ている。
＊基礎的な課題を与え、合格するまで取り組むことが出来た。
＊担当者が自作の補習支援の教材を作成し、指導にあたった。
＊授業日の放課後、学習が遅れがちな生徒から希望をとり、希望者に学習指導を行っている。
＊主体的に取り組もうとする意欲の喚起。
＊基礎計算の定着に役立った。
＊個別の指導を実施することができる点と時間をかけてじっくりと指導できること。
＊教師と違った立場の人からの指導が、生徒にとっては新鮮で学習意欲の喚起につながった。
＊大学生が、放課後の補習学習に学習支援に入った。
＊現在４人の大学生が、週１回程度来校し主に教科支援を行っている。夏季休業中には、３年生の補習を実施し個別学習への支援を行っている。
＊ランチタイムストーリーによって、国語表現力の向上を図ることができた。

イ．長期休業中の学習支援

＊土曜授業に実施される定期テスト前のプリント学習において、応援団が各クラスに入り、丸付けをしながら個別指導を行う。また、年間５回実施している校内の数学検定試験において丸付けをしていただいている。

＊定期テスト前に実施している放課後補習教室（質問教室）で個別指導を補助していただいた。

＊1年生の国語の授業で始めの時間に漢字テスト行い丸付け、授業の終わりに返却と解説をします。国語の基礎基本の学力が向上しました。夏休みに数学・英語の低学力生徒に対して補習を行い学力向上につながった。

＊教育実習後の大学生を学校応援団に登録し、夏季休業中の補習学習の支援をしてもらう。

＊３学年が長期休業中及び放課後に、数学や英語の個別による学力向上に向けた補習活動。

＊教育実習生（予定者も含む）による長期休業中の補習における個別指導。

＊夏休みの補習活動に対して応援団の方々に支援していただいている。

＊長期休業中に英語と数学の補習を行ってもらい、学習意欲の向上に繋がった。

＊夏季休業中に全学年で国語・数学・英語の補習(50 分×２４コマ・個別指導）を実施。

＊長期休業中に学習会を実施した。各自で課題を用意し、教員および応援団員が支援した。

＊夏季休業中の補充学習支援。主に個別指導を行った。（国語の漢字、数学、英語）

＊夏季休業中に低学力の生徒を集めて補習を行い、近隣高校の生徒に学習支援をしてもらった。

＊放課後及び長期休業中に学習支援（補習）を行っている。３学年生徒を対象とし、学習支援（補習）参加についての案内文書を３学年生徒・保護者に配布し参加者を募っている。

＊夏季休業中の補習学習で、教育実習経験者や卒業生に学習支援活動をしていただいている。

＊家庭学習の方法が分からない生徒を対象に、夏季休業中に少人数による学習指導実施。

＊学校応援団とＰＴＡと学校が協力して公民館を借り地域の高校生を講師として週休日や長期休業日に補習を実施した。

＊３年生の土曜補習（数学）において、教職員と協力し、生徒の分からないところをアドバイスするなどの支援を行った。

＊夏季補習や定期テスト前の質問日に、元教員の方や教育実習生にアシスタントとして協力していただいた。

ウ．体験活動の支援

＊農家の方や PTA の支援による農業体験並びに食育に関する体験活動。学生ボランティアによる授業時の学習支援。

＊学校農園でサツマイモの栽培において、生徒と一緒に活動し、畑を耕す・苗を植える・除草作業等の指導をしていただきました。

＊植物の植栽作業における細やかな指導により、生徒の活動が活性化した。

＊乳幼児とのふれあい体験活動の中で、応援団の方に補助的な支援をしていただいた。

＊保育園での園児と老人会との世代間交流事業(流しそうめん、もちつき)への参加。

＊地域の方をゲストティーチャーとして迎え、クラス単位で実技・体験を支援いただき、学習意欲の喚起から学力向上につなげている。

＊文化祭体験講座指導者。音楽の授業での楽器指導（三味線)。

＊体育祭、文化祭等の準備・運営等における補助的な活動・環境学習や郷土学習の講師。

＊体験学習会の講師として専門的な内容の指導をしてもらえた。

＊調理実習でエコクッキングについての学習を行った。

＊職場体験をとおして、学習活動への意欲が向上した。

＊体験講座を１６講座開設し、生徒が普段の授業では学習することのできない内容を、地域の方（学校応援団の方）に教えていただく学習を２時間行う。

＊福祉体験学習で地域の車イスバスケットボールチームを呼び、お話と体験を行った。

＊生徒の体験不足、経験不足を補うことができた。学校と家庭、地域との連携が深まりつつある。

＊国際理解交流学習での体験学習、職場体験学習や介護実習等を学校応援団と連携して行うことにより、生徒の日本の文化に対する見方や世界観、職業観等を広げ、深めることができた。また、人間関係作りやコミュニケーション能力の育成に効果的であった。

＊福祉体験学習において、社会福祉協議会・ボランティアの方々と共に指導・支援を行った。

＊福祉体験活動や３年生の補習授業補佐。

＊手もみ茶体験。

＊１年生総合的な学習の時間の「地域に学ぶ」で地域の方々に体験活動の講師として支援していただいた。さわやか相談室にいる生徒の学習支援を実施した。

＊総合的な学習の時間において、栽培活動を指導・支援していただいた。

＊地域ならではの体験活動（杉山城跡整備活動）では、地域の方の支援がなければ生徒に体験をさせること自体が困難になってしまう。生徒は実際に体験をしないと得られないものがある。

＊１・２年生で農業体験（1 年生は稲作・２年生は畑作）を実施し、学区内の長寿クラブの方々が指導してくれている。

エ．専門家による実技指導

＊音楽の実技指導。太正琴の指導、楽器の指導、歌唱・合唱指導、技術科指導。

＊校内合唱祭のクラス練習に参加し、歌唱指導を行った。本物に触れ専門性を生かした話をしていただくことで、意欲の向上につながった。

＊書き初め講習会（書写指導)。書初め大会講師。書写「国語」実技指導。

＊近隣にある大東文化大学の書道科学生の書写指導により技能の向上が見られた。

＊書き初め等では、学校応援団の方が複数クラスに入っていただけるので、担当教諭は他の生徒の指導にあたれ、より細かな指導ができた。

＊国語科の書写の授業において、実技指導・添削指導を行っていただいた。

＊技術科（木工）において大工さんによるプロの技を披露していただいたこと。（１年)・書道教室を開いている方に、書きぞめの指導をしていただいた。（１，３年)・家庭科（調理）で、所沢の焼きダンゴの実演と実習をしていただいた（２年)。

＊調理実習、・防災訓練、・箏曲指導、・新井橋太鼓の指導（伝統芸能の継承)・読み聞かせ活動・花はなプラン（緑化活動)。

＊家庭科の裁縫指導、国語の書写指導を実施した。放課後学習会での補習授業を実施した。

＊家庭科調理実習の支援。魚のさばき方の実技をとおして、魚を三枚におろせた生徒が増加した。

＊ミシンの練習や手縫いの基礎縫い練習の授業の時に支援に入って頂くことで、教員一人よりも、より安全にきめ細やかな指導をすることができた。

＊家庭科調理実習、郷土料理の講師として調理の手順を示し、生徒の中に入り手伝ってくださった。

＊調理実習の補助により、安全に自信を持って学習に取り組め、基礎基本を身につけられた。

＊教員一人の目ではなく、多くの目が生徒に届くことで、生徒が意欲的に取り組んでいる。その結果、授業の内容がしっかり定着できた。(調理実習、ミシン指導等)

＊実技支援タイプ・・・保護者や地域の方（消防署員・調理師等)、教員が講師となり講座を行った。体験行事タイプ・・・市の施策である鳴子踊りの支援活動を行った。

＊調理実習における師範と支援、柔道実技における師範と支援。

＊調理実習において地域関連サークルの方が各クラス４名ずつ実習補助に入り、大いに役立った。

＊家庭科授業の郷土食（手打ちうどん）作り等は、教員だけの話でなく、実際に地域の食農の観点、伝統食の観点からも具体的な話が聞け、また実習でも実技支援が生徒の技能の向上に役立った。

＊地元の剣道連盟の協力の下、剣道の授業実技師範や補助を行っている。

＊①柔道会員による柔道授業の補助②学校ファームへの支援③家庭科の調理実習補助（郷土料理）④音楽授業での雅楽指導

＊伝統芸能の地域への発表会等で、生徒が自信をつけ学習に対しても積極的になった。

＊郷土芸能（獅子舞）の伝承活動に、地域の獅子舞保存会の方に月２回指導を受けている。

＊郷土芸能部が毎週１回、地域の神楽保存会の方々に指導いただき、地元の鷲宮神社に伝わる国の重要無形民俗文化財指定「土師一流催馬神楽（はじいちりゅうさいばらかぐら)」を受け継いでいる。

＊文化祭で地域の伝統芸能を生徒と一緒に発表した。

オ．教育講演会、総合的な学習の時間等への支援

＊１年生の総合的な学習の時間における「職業学習」。
＊総合的な学習の時間における講師、ふれあい講演会講師。
＊進路指導・キャリア教育の観点から、職場体験実習の前に、働くことについて知るというテーマで身近な方々から様々な職業の内容についてのお話を聞いたり、美容師や大工等実際の体験活動を行い、職業観や勤労観について理解を深めることができた。
＊進路講演会での講演
＊特別活動の時間におやじの会の方が中心となり学校応援団として進路学習を、１年生の授業で行っていただいた。
＊進路指導・キャリア教育の一環として、地域の人材を活用し「勤労観・職業観」について講演会等行った。体育祭、学校祭等学校行事にて参加・支援活動を行った。部活動外部指導者として、生徒の技術向上に努めた。
＊「総合的な学習の時間」を活用し、地域の方々（学校応援団）から菊の栽培や地区に伝わる「樽踊り」、「歌舞伎」を教わり全校で伝統文化の伝承を行っている。
＊地域への貢献などをすることで、自己効力感が増加し、自己肯定感も向上することで、意欲の喚起につながった。

カ．読書活動への支援

＊読み聞かせ・文化祭での体験活動への支援。
＊PTA 図書コーナーの設置。
＊ブックトークで紹介していただいた本を読んでみたいという生徒が増加した。
＊読み聞かせ（1 年）に携わっていただくことで、生徒の読書に親しもうとする意欲の向上に繋げることができた。これにより、多くの生徒が図書室に足を運ぶようになった。
＊月１回実施している「読み聞かせ」によって、生徒が読書に親しむきっかけとなった。
＊図書ボランティアの方達によって整理された図書室の本を子供たちが読むようになった。
＊読み聞かせなどで生徒の集中力が高まった　＊読み聞かせブックトーク
＊地域の方からの定期的な読み聞かせを行い落ち着いた学習環境になっている。長期休業日を利用し、生徒の興味関心に合わせ、体験的な学習を実施している。
＊読書紹介や読み聞かせにより、読書への興味・関心が高まった。
＊朝自習の時間に月に１回、１年生で読み聞かせの時間をとった。読み聞かせを行うことで、朝練習からの切り替えができ、落ち着いた雰囲気で授業を始めることができ、また、読書に興味を持つ生徒も増え、学力向上のための一助となっている。

キ．学校行事、その他の支援

＊校舎敷地内の樹木や植物を整備、また掲示教育をしていただいた結果、理科の自然観察などの学習環境の向上、学力向上が見られた。

＊支援者による小グループ内指導の充実を図ることができた。それによって、生徒たちの課題をその都度、きめ細やかに解決へと導くことが可能となった。

＊定期試験一週間前の朝学習を実施しているが、来ている生徒にわからないところを指導していただいている。

＊寺子屋学習の実施（地区勤労福祉センターおいて、定期テスト前の土曜日に年間５回)。

＊運動会や音楽会に取り組む姿を応援することで、生徒の意欲喚起につながっている。

＊運動会での競技備品を作成していただき、競技が盛り上がった。

＊資格試験（漢字検定）の支援

＊毎週土曜日に実施している土曜寺子屋では、地域のボランティアが無償で参加者が希望する教科を教えている。

＊相談室登校になってしまった生徒の学習支援で、十分意欲を喚起した。特別支援学級の実技実習支援で考える力や表現する力：学力が向上したと考えられる。

＊特別支援学級での和太鼓指導。

＊茶道・農業体験・図書支援・書道支援＊伝統芸能（白久串人形と神明社神楽）の指導。

＊生徒が郷土の歴史、文化（伝承芸能)、生活等に関心を持ち、総合的な学習の時間の個人調査のテーマにする等、学力向上への大きなステップになっている。

＊特別支援学級調理実習への支援。

・短歌の歌人の方に平和学習の中に短歌を取り入れ、指導していただいた。

☆ 参考資料

文部科学省ホームページ

「教育」「地域の教育力の向上」「学校支援地域本部」

http://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/004.htm

埼玉県教育委員会ホームページ

「家庭地域連携課」「学校応援団」

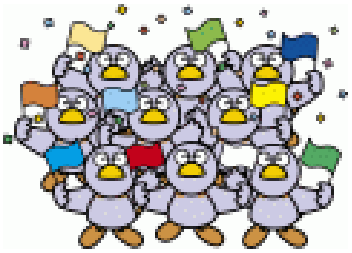
http://www.pref.saitama.lg.jp/site/gakkououendan/

☆ 調査研究担当

埼玉県立総合教育センター

生涯学習推進担当　社会教育主事　金子　秀樹

主　事　赤岩　昂



埼玉県のマスコット

コバトン

埼玉県立総合教育センター
Saitama Prefectural Education Center